

信仰と実践

FAITH AND PRACTICE

<http://faith.reformed.jp>

2007年4月9日 第6号 第2版 編集・発行 関口 康

〒270-0021 千葉県松戸市小金原 7-20-8 ysekiguchi@nifty.com

翻 訳

A. A. ファン・ルーラー

「ウルトラ改革派とリベラル派」¹

(連載第4回)

関口 康訳

3、予定理念からの論理的演繹

ウルトラ改革派のグノーシス主義的性格は、ある方法によって常に繰り返し隠蔽が行われる。その方法は、ウルトラ改革派の人々が前代未聞の激しさをもって取り組む、偉大な改革派的真理としての予定論である。それは十分な意味での、すなわちドルト教理規準的な意味での二重予定論である。今ここで、この真理についての解説をするつもりはない。私の考えでは、予定論は、人間存在についての洞察としてこれまでに見いだされた中で最も深いものである。それはカルヴァンとドルトレヒトの教父たちに栄誉を授け、霊的な勇気と力をもたらした。また、この真理が霊的存在にもたらす緊張はどれほど大きなものでありうるかについても徹底的に語られ、広げられてきた。アウグスティヌスは、最後のところでいつも躊躇を持っていた。ルターは、最終的には後ずさりし、沈黙してしまった。

二重予定の真理と事実は、経験的に捜し求めることができるものである。ある人にとっては、若いときから死の日に至るまで、福音が全く問題にならない。福音は彼に何も語らない。彼は生ける屍のように見える。彼はこの光によって目がくらむばかりである。恵みが彼の心をかたくなにしたのである。同じ家族の中の他の人は、彼の全

¹ A. A. van Ruler, *Ultra-gereformeerden en vrijzinnig* (1970), in: *Theologisch werk* (Th. W.), Deel 3, G. F. Callenbach N. V. ?Nijkerk, 1971, p.98-163.

存在の、心と体の全繊維をもって、子どもの頃から死に至るまで、まるで釘と磁石のように預言者たちと使徒たちの証言に張り付いて離れない。彼が簡単に引き離されることはありえない。彼は福音と信仰に対抗する幾千もの学問的・哲学的な反対や議論を知っている。しかし、すべては去り行く。救いの力が、まるで魔法のように留まり続けるのである。

また、予定の真理は聖書から読み取られたとおりの事柄でもある。生ける神は意志され、行為される神である。神は歴史によって選びと遺棄を実行される。遺棄の教理はあまり、あるいは全く聖書の中には見いだされないかもしれない。教理的な事柄である。教義は必ずしも聖書に立っていないことがある。しかし、果たしてわれわれは、二重予定論の道筋の上で考えていくことなしに、聖書の十全な内容を実際に把握することができるのだろうか。

この経験的側面と聖書的側面の他に、論理的側面が、予定の教義の形成においては常に役割を果たしてきた。選ばれているということがあるのだとしたら、選ばれていないということもあるのではないだろうか。そのような聖書的な一組のペアがあるのではないだろうか。選びの概念は、常にもう一つの概念と共に語られるべきものではないだろうか。そして、選ばれていないということは、遺棄されていると言い換えるところまで突き詰めて考えることができるのではないだろうか。この遺棄という表現をあらゆる暴力をもって回避したいと欲することは、卑怯なやり方ではないだろうか。

このようにして初めて、十分な意味での二重予定論となるのである！それは真理であり事実であるところの二重の予定である。ところが、J. G. ヴェールデリンクは、ウルトラ改革派の人々が予定の真理 (waarheid van de predestinatie) を予定の理念 (predestinatie-idee) へと取り替えたことに衆目の注意を促した。これはおそらく不適切な表現である。実際ヴェールデリンク自身は、この問題に関する続編の研究書においては、奇妙な不可知論的な闇の中に予定を見出すに至ってしまっている。とはいえ、ヴェールデリンクは、真理としての予定と理念としての予定との区別をしてくれたことにおいて 深い洞察力を持つ多くの神学者たちの場合と同様 われわれに価値あるヒントを与えてくれた、と言ってよいだろう。

われわれは予定の真理と事実を、身震いと驚愕とをもって見つめ、認識し、信じている。ところが、それが理念に置き換えられるときには事柄の本質から出発することになる。それは原理になる。その原理から論理的推論という道を通して全体系を演繹するのである。予定の理念が体系の下部構造を支配するのである。そうなるとう無意識のうちにわれわれは、人間は（今や人間はその原理を見いだした者である）全体系を完成させ、閉じることができる、という仮定のもとに生きているのである。

最も悪い点は何だろうか。「閉じた体系」を考え出すことだろうか。一度考えたことを別様に考え直そうとするとところだろうか。論理的推論の道を通して歩き回ることだ

ろうか。考える人間は悪いものを手に入れる、という点だろうか。それとも、予定の真理を論理的体系の原理にしてしまうことだろうか。

最後の点には問題の核心がたしかにありうるだろう。その人は、思想的に硬直している。存在を忘れている。事実を忘れている。福音を忘れている。福音が宣べ伝えられているということを忘れており、そしてまた、救いが全き十全性において全人類の前に現に存在するものとして差し出されているということ、を忘れていたのである。そのところで すなわち、生きている存在の生起する事実と、宣べ伝えられた福音とにおいて まさにそのところで、人の理解を超えて、謎めいた仕方で二重の予定が行われるのである。人間は全き事実において選ばれもし、棄てられもする。エペケ・ノールドマンズと共に、「神はいちばん最後の瞬間に、永遠のご決意をなさるのだ」と語るのである。

もちろんわれわれは、これらのことを越えて考え続けることができる。機会あれば、二重予定論を出発点にすることもできる。二重予定論からすべての事柄を考え抜いていくことができる。そのとき、二重予定論は原理にさえなるのであり、そこから楽々と（神学は遊びでもあるのだが）論理的体系を演繹していくのである。しかし、それ以上に与えられていることについて、われわれは、同じように何をすることができ、何を許し、何をなすべきなのだろうか。一体われわれは「予定論的神学」というようなものだけを作り上げて、それで何を望むのだろうか。同様にわれわれは、その裏面の「三位一体論的神学」を持たねばならないのではないだろうか。また、その対極の「歴史的・終末論的神学」を、さらにまた「神の国の神学」をも持たねばならないのではないだろうか。あるいは同じく重要なものとして「キリスト論的・聖霊論的神学」をも持たねばならないのではないだろうか。「罪の神学」を含む「創造の神学」も必要ではないだろうか。

キリスト教には、人を夢中にするものがある。ただし、それはキリスト教の原理ではない。多くのものが同時にある。このことが教えているのは次のことである。すなわち、どれほど多くの論理的思考方法を踏破したとしても、ばらばらの教説（loci）を正しく並べるための最善の順序を見いだすことは不可能であるということである。一つの原理から「閉じた体系」を構築することは可能であると考えるのは、もうやめようではないか。もちろん、われわれは探究しなければならない。それと共に体系を考えなければならない。しかし、その体系をわれわれ自身が見いだしたものであるかのように考えるべきではない。われわれが見いだすよりも前に、福音自身があまにも豊かであり、あまにも多くの枝を張りめぐらしていたのである。

大胆に言えば、論理は歴史的福音によって破壊されなければならない。歴史的福音はわれわれを、救いと存在の多面的で把握不可能な事実の中へと引きこむのである。福音は、少なくとも罪人である者にとっては想像する以上に事実そのものなのである。

そのことにウルトラ改革派の人々は、しばしば気づいていない。彼らは福音を論理に置き換える。彼らは、もっぱら永遠の二重予定という観点から、一切のことを考え抜く。そのときに起こることは、当然のことながら、彼らが語ることのすべてが非常に似かよったものになる、ということである。歴史的キリストの一切、伝統における救いの仲保性の一切、福音と教会との外面性の一切、人間の主体性の一切。これら一切合財が、二重予定の地獄の火を怖れるのである。「永遠の聖定」という一つの事柄に一切が押しとどめられてしまうのである。

哲学者、とくにヘーゲル系の哲学者は、その中でわが家にいるような居心地良さを驚くほど感じることができるであろう。しかしそれは、キリスト教的に言えば危険なことである。教会を哲学の教室にしてしまうべきではない。そのようなことを、ウルトラ改革派の人々が行うのである。例えて言うならば、説教の中でそれが提供されているかどうかでその説教が誠実なものであるかどうかが決まるというほどに、まさにその瞬間に一切の命運がかかっているのである。

福音は、このような論理の砂漠からわれわれを呼び返す。福音はわれわれに回心をもたらすであろう。そのとおり！真の回心とは、予定理念によって論理的に逃げ出すことではありえない。真の回心とは、福音の把握しがたい豊かさと確かさの中で悔い改めることである。この豊かさと確かさを失うならば、それは異端ではないだろうか。予定の概念の場合も同様である。そのとき人は、純粋な改革派信仰によって非改革派的になっているのではないだろうか。

(次号に続く)

「ファン・ルーラー研究会」からのお知らせ

「ファン・ルーラー研究会」は、会員募集中です。ぜひご参加ください。詳しくは、ホームページ(<http://vanruler.protestant.jp>)を御覧ください。入会希望・意見・質問等は ysekiguchi@nifty.com (関口 康) までお寄せください。

「アジア・カルヴァン学会」からのお知らせ

「アジア・カルヴァン学会」は会員を募集中です。ぜひともご参加くださいますよう、お願いいたします。詳しくは、学会公式ホームページ(<http://society.protestant.jp>)を御覧ください。また入会希望・意見・質問等は Sno2999@aol.com (野村 信) までお寄せください。